マオリ族における初期の文化接触変容

溝口靖夫

近代列強と未開諸種族との間の文化接触の現象において、太平洋は甚だ興味深いところである。太平洋も西太平洋では古くからスペインとポルトガルが覇を競ったのであるが、東太平洋では主としてイギリス、アメリカ、フランスの三者が三つ巴となつてしのぎをけずつている。即ち、ポリネシアのハワイにはアメリカが、タヒチにはフランスが、ニュージーランドにはイギリスがそれぞれ勢力を扶植するに至つた。本研究では、ポリネシア民族のうちで、特にイギリスによる原住民との文化接触変容[1]の現象を、ニュージーランドのケースにおいて、キリスト教の布教を中心として、考察したいと思う。

一

ニュージーランドの住民はマオリ族（the Maori）[2]と呼ばれている。この人々がいつ頃からこの地に住むようになつたかについては、たしかなことはわからないが、伝説から想像して、多分西暦十世紀の初め頃ポリネシア人により発見され、一一五〇年頃或いは一二〇〇年頃及び一二五〇年頃に東部ポリネシア諸島から若干のものが来島し、一三五〇年頃にダブル・カヌーからなる移民の船団がハワイキ（Hawaiki）と称する島―恐らく現在のタヒチ島であろう―からこの

島に移住したものとされている。[3] 彼等は人類学上ポリネシア人に属し、その遠い祖先はマライ又はインド方面であつたものと思われている。

故にマオリ人はこの地に移つたとき既に環境への適応を余儀なくされたのである。[4] すなわち、初めは熱帯圏の食用植物及び家畜類を伴つたのであるが、ニュージーランドに移つたとき、寒冷な気候が必ずしも凡ての従前の動植物の保持継承を許さなくなり、ここに気候馴致（acclimatization）の現象が起つた。たとえば、椰子やパンの木の実やバナナなどは育たなかつたのでこれらは移住の途中で失われた。但しタロ芋とかヤム、甘藷などは比較的温暖な北島に移植された。寒い南島よりも北島に多数のものが居住した理由の一つであると思われている。また甘藷の栽培の仕方が南米のインディアンのそれとよく似ており、更にニュージーランドでは甘藷のことをクマラ（Kumara）と云い、南米のエクアドルのインディアン語ではクマル（Kumar）と呼ぶことなどから、ニュージーランドと南米との間にも歴史的に密接な関連があつたことが考えられている。[5] 又、楮（かみの木）も移住のとき齎らされたが、これも気候の変化のため、衣服の原料に用いることができなくなつた。[6]

この様にマオリ人は太平洋の熱帯附近からニュージーランドに南下したので、そのとき自然的環境の変化とともに、衣食住の方法に新たな調整を余儀なくされたのである。その他、彼等の祖先がマライまたはインド方面から太平洋の島々を転々と移住している間に、他の姉妹種族等と接触したことは疑いなく、その都度、彼等の生活様式、言語、集団の社会組織等に変化を来したことも想像できるのである。しかしこれらの変化は、ほぼ同種文化の種族間における自然的環境の変化による変容であつたので、ディクソンの言葉を借るならば、同一文化圏内の文化伝播としての文化の第一次的伝播[7]における文化変化であると云い得る。これに対して、後年白人の来島による文化接触は、全く異種類の文化との接触であるから、これはディクソンの所謂第二次的文化伝播であり、その結果文化に変化を招くようになつたので、

これはアカルチュレーション―文化接触変容―と呼ばるべきものである。本稿の興味は主として、後者即ち白人との接触の場合に関わるのであるが、これを見るに先立ち、いま少しくマオリ族の固有文化の諸特徴を瞥見したい。

マオリ族はマライ・ポリネシア系であり、オーストラリアの原住民と比較して相当発達した文化の段階にあつたものと言い得る。後者は黒人の系統に属しており、前者はアリアン系統をも交えていると考えられている。[8]

マオリ族はその生活様式も、狩猟漁撈と共に、若干の農耕の段階に入つていた。即ちタロ芋やヤム、甘藷、百合根等が栽培された。彼等は手芸に長じ茅葦の家をつくり、又家の柱や板などに彫刻し、カヌーや撓をつくり魚釣り針や櫛や笛や槍等を作るのにたくみであつた。カヌーの大なるものは長さ八十呎に及び、百人の漕ぎ手を載せるものもあつた。武器としては槍と棍棒が主であつた。婦人は編みものに長じ、また籠をつくり、料理にあたつた。

社会組織としては、酋長と自由民と奴隷の三階級からなつていた。祭司は一般に酋長が兼ねていた。[9] ニュージーランドの全体に約二十の種族があり、これらはかの十四世紀の大移民団のそれぞれのカヌーの名を冠するものと伝えられており、それぞれ大酋長により治められた。種族は更に若干の部族に分れ、各部族は酋長により治められた。更に部族は氏族に分れており、氏族は一種の血縁共同体で土地を共有し、生れた子供も家族に属すると同時に家族の連合としての氏族の成員となるのである。

家族は一般に父系制で三世代のものから成り、妻は結婚とともに夫の家族に加わる。ただし時としては、父と子らは妻の親族のものと一緒に暮すことも出来、この際は妻の氏族に属するものと見なされた。いずれの場合にも、家族集団における権威と権力とは年長の男に置かれたことに変りなかつた。婚姻関係としては、一夫多妻制が他のポリネシア諸地方と同じく酋長及び自由民の間で慣習とされ[10]概して酋長は多くの妻を所有した。妻の数はそのものの勢力を表わすものとさえ考えられていた。幼児婚姻制も認められ、婚姻は家族と家族との結合契約のシンボルとされたのである。婚姻の相手は同族たると異族たるとを問わなかつたが、初いとこ同士の結婚は通常許されなかつた。

土地の所有権に関しては、ポリネシアに大体二種の型が認められ、一は全部族の共有とされ、部族の代表としての酋長へ所有権が認められた場合と、もう一つは酋長自身に絶対の所有権があり、酋長が次位の酋長や一般自由民にこれを借し与える場合との二つである。ニュージーランドの場合は第一の型であり、ハワイの場合は大体第二の型に属するが、共に土地の所有権は神聖にして、みだりに犯すことのできないものであつた。この点が後年マオリ種族と白人との接触上重要な一契機となつたのである。即ちニュージーランドでは、土地は部族の共有ではあるが、慣習的に各家族がそれぞれの土地に対して既得権を所有するものと考えられ、その境界線は代々神聖視され不可侵のものとされていた。しかも従前同族間に土地に関する紛争が殆んど見られなかつたのは、タブー制のほか、島の土地の面積に比して人口が僅少であつたため、土地が狭少と感じられなかつたからであろう。これの耕作に関しては、各家族が自分の権利のある耕地に蒔く種を用意するのであるが、種蒔きと耕作と刈入れとは氏族全体の共同で行われた。しかしその共同労働の結果としての収穫は個々の家族の所有に帰すという風に部族の経済秩序が個人の権利と集団作業との調和の上に立てられていたのは[11]注目に価するものである。

彼等の宗教について見れば、多神教的であり、天と地と海にそれぞれ多くの神々があり、又機能的には農業、漁業、林業を司る神であるとか、戦争の神等が信じられた。しかしこれと同時に、それらの諸神の上に主神イオ（Io）が信じられたことも他のポリネシア種族におけると共通であつて、この最高神の考えは後年キリスト教の伝道に当り、それを受容するための一種の地盤となつたことも考えられている。その他霊魂不滅及び祖先神の信仰及び魔術、タブーの慣習等、大体に他のポリネシア諸種族における場合と共通であつた。

マオリ族の風習のうち最も原始未開的なものは食人の風習であつた。彼等は戦争の捕虜を食用にした。火で焙つて同族のものと分けて食べるのであつた。これは宗教的な意味からよりも食糧の少なかつた時代においてこれを補うためであつたが、又同時に、彼等は血液を人間の生命の素であり活動力の素であると考え、その血を分けて飲み合つた。[12]又そ

の首をとつて、戦勝の記念品としてこれを家に保存する習慣があつた。これは、太平洋やアフリカその他台湾においてもそうであつたが、未開諸種族の間で広く見られるものであつた。マオリ族の間でもそれはトロフィーとして、又成年に達したことのしるしとして尊重された。食人の風習でマオリ族のそれが他のポリネシア人のそれと異る特徴は、彼等がただ敵の殺されたものを食するだけでなく、捕虜をいつでも食用に供し得るよう奴隷として養いおく風習があつたことであるとされている。[13]

二

白人による本島のいわゆる「発見」は一六四二年のことで、十二月十三日オランダ東インド会社のタスマン（Abel Janszoon Tasman）がこの島に到来した。彼はボートで部下を上陸させようとしたが、マオリ人は彼等を攻撃して殺害した。そこでタスマンは上陸を断念してこの地を立去つた。この様に白人とマオリ人との接触は最初から対立関係をもつて始められたことは、今後の両者の関係に影響するところが大きかつた。ハワイにおける住民と白人との関係が比較的平和裡に始められたのと対照的である。その後イギリス海軍のクック（Capt. Cook）は一七六九年十月六日北島の東岸に到着し、幾度かの失敗の後、住民と親交を結ぶことに成功し、北島にも南島にも上陸し、正式にこの諸島を占有した。彼はこの時、豚や家禽や馬鈴薯などを彼等に贈り、その歓心を買うことにつとめた。従来この島には豚も家禽もいなかつたので、殊に彼等に喜ばれたのである。しかるに、クックの第四回目の訪問のとき、その部下フルノー（Capt.Furneaux）と住民の間に紛争が起り、彼の船員が野菜を得るため上陸したとき、虐殺されてしまつた。フルノーが部下を捜索にやつたところ、彼等は程なく住民が籠の中に多くの人間の肉塊を入れているのを発見したが、その中には、いれずみをした腕があり、それがたしかに船員のものと確認されたのである。[14]

その次にニュージーランドを訪れたのは、フランス人探検家ド・シュルヴィーユ（De Surville）である。彼は一七六九年十二月の半、クックに後るること数週間にして北島のダウトレス・ベイに到着した。彼はこの地に留まること二週間、そこで住民からよく待遇されたが、彼の部下で病気で寝ていたものに対する住民の態度に良からぬものがあつたというあまり根拠のない理由のため、シュルヴィーユは住民の家屋を焼き払い、その酋長を捕虜にした。それから十八ケ月の後、他のフランス人マリオン（Captain Marion du Fresne）がタスマニアからアイランド湾に向う途中北島の西海岸に寄港し、そこで数週間を送つたが、その間フランス人は同島のタブーを犯し（禁止の場所を犯し、禁じられた木を使つて料理をし）且つ酋長達を監禁したので島民の怒りを買い、住民はマリオンを宴会に招き、彼が部下十数名と船から下りたとき、彼等を取巻き、殺して食べてしまつた。マリオンの後をついだクロゼ船長（Captain Crozet）は、その復讐のため数百の住民を射殺し、村を焼き払つた。これから後数年間、白人と住民の交わりは絶えてしまつたのである。

一七九四年イギリス人の捕鯨船の乗組員が同島を訪れて以来、近海を航行する船は、石炭の補給のためこの地に立ち寄るようになつた。又、オーストラリアからの逃亡囚人や船員等で来島するものもふえ、だんだん白人の居住者が人数をました。かくて十九世紀末までにニュージーランドに到来の白人は主として半ば海賊的な性格を帯びるものであつた。船員で罪を犯して母船から放逐されたもの、或いは難船して島に辿りついたもの、又は捕鯨や海豹猟を業としたものなど、あらゆる種類の冒険家であつたが、中でも逃亡囚人は兇暴であり島民を苦しめた。北島の東北の海岸であるアイランド湾には、この種のものが特に多く居住していた。

マオリ族は慓悍ではあるが、彼等に危害を加えない白人とは親しく交つた。そして白人の中には土着の婦人と結婚して、すでにマオリになりきつているものもあつた。彼等は土地のものからパケハ・マオリ（Pakeha Maori）と呼ばれた。白人のことを「パケハ」と称したのである。

これら初期の白人がマオリ人に伝えたもののうちで固有文化様式に一番大きな変化を与えたものは、鉄砲であつた。従来マオリ人は鉄を知らなかつた。従つて、鉄の武器が石の武器に対する優位は余りにも明白であり、住民は白人の鉄器を手に入れることに熱中した。斧と鉄砲が従来の木や石や鯨の骨等でつくつたものに置き換えられたのである。文化社会学上の代置(displacement)又は交替(substitution)の現象である。[15] ことに銃器はマオリ族に新たな戦闘様式を齎らし、その結果同族相撃つという惨事を惹き起すにいたつた。鉄砲伝来後僅か二十年以内に同島の住民約二万人がその犠牲に供されたと云われている。[16]

斯くて開かれた新天地にイギリス人の植民は始められたのであるが、同島における植民は全くキリスト教の布教によつて開拓されたというも過言ではない。これアメリカのハワイ植民、フランスのタヒチ島植民などとともに、植民と布教との関連における最も顕著な例として注目すべきものである。

ニュージーランドの最初のキリスト教の布教者はサムエル・マーズデンである。彼は「ニュージーランドの使徒」と呼ばれており、インドのケアリー、中国のモーリソン、ジャワのメドハースト、マライのミルン等とともに、イギリスが生んだ代表的な布教者である。

マーズデン(Samuel Marsden, 1764-1838)は一七六四年七月二十四日イングランド、ヨークシャーのホースフォース(Horsforth)に小商人の子として生れた。幼にしてメソジスト派の教育を受け、ケンブリッジのセント・ジョンズ・カレッジを卒業した。そのころ彼は外地福音宣伝協会(Society for the Propagation of the Gospel in Foreign Parts-S.P.G.)のブレイナード(David Brainerd)の影響により外国伝道を思い立つた。ブレイナードは同協会の宣教師としてニューヨーク附近のインディアン伝道に従事し、肺を患つて僅か二十九才で病歿したのであるが、彼の影響により、インドのケアリー、マルチン、ニューギニアのチャルマース、及びこのマーズデンなどが現われたのである。マーズデンは一七九三年オーストラリアのニューサウスウェールズ植民地附の初代牧師ジョンソン(Richard Johnson)の助

手として副牧師に任ぜられ、結婚したばかりの妻をともない、一七九三年九月三十日イギリスを出帆し、翌一七九四年三月十日シドニーに到着した。この地でニュージーランドから来ていた二人の住民と親しくなり、その地の有様を聞き、伝道の必要を感ずるようになつたのである。この二人はノーフォーク島の囚人植民地の知事キングによつて、イギリス式の生活を学ぶためポートジャクソンにつれられたものである。その後ニュージーランドからマオリ族のものがニューサウスウェールズに渡来したが、マーズデンは彼等を家に招き、キリスト教を教えた。しかるに一八〇六年そのうちの一人の酋長テパヒ（Te Pahi）はマーズデンの教えを受け容れて、ニュージーランドに誰か教師を送つてほしいと申し出たのである。そこでマーズデンは一八〇八年イングランドに帰り、教会外国伝道協会（The Church Missionary Society-C.M.S.）に対してマオリ伝道のことを提案した。同協会は成立後日なお浅く（一七九九年設立）、ニュージーランドの様な遠隔の地に宣教師を送ることに不安を感じたのであるが、マーズデンの熱心な申し出により、ついにこれは実現することとなつた。しかもこのときマーズデンが同協会に述べたマオリ伝道の方法は文化接触変容の上で重要である。

「自分の意見によれば、福音を伝えるための道備えをなし得るものは文明以外にはない。技術によつてのみ、異教徒への福音伝達の道開きが達成されるのである。……技術と宗教は共に進まねばならない。技術によつてのみ異教徒の注意を惹くことができ、その悪癖を改めることができる。彼等の注意が喚起され、道徳的な又勤勉な習慣が教導されるに至らなければ、彼等に対する福音の宣伝には殆んど何らの進歩も認め得ない。……技術抜きの福音宣伝は何時の時代にも異教徒の間においては成功し得ないであろう。」[17]

マーズデンのこの見解は後年イギリス人自身によつて批判され事実はその反対であるという意見ももたれたのであるが、同協会の委員達は、むしろ、マーズデンの言葉に共鳴したものと考え得る。[18]

マーズデンの提唱により、先ず二人の技術家が選ばれた。一人はホール（William Hall）と云い、指物師であり、他

はキング（John King）と云い、靴屋であつた。彼等は平信徒であつたが、マーズデンに従つてニュージーランドに到り、所期の目的を実現するため、それぞれ準備教育を受けることになり、前者は造船と航海技術を、後者は撚絲及び亜麻布製造の技術を習得した。この他更に鍛冶技術者が要求されたが、これは得られなかつた。しかしそのかわり、ケンドール（Thomas Kendall）という若い学校長が推薦された。彼は同時に農業の知識があり、これら少数のものが一団となつて、ニュージーランドへ向うこととなつた。人撰が決つたとき、教会外国伝道協会は彼等に土着民の教化のため次の様な注意を与えている。[19]

「当協会の目指すところは、土着民にキリストの知識を与えることである。そしてそのため、文明生活の技術をも伝達することである。」故に、伝道者達は土着民の宗教上並びに日常の生活に関して共に注意を怠つてはならない。即ち、先ず宗教上の注意としては、（一）日曜日の神聖が保たれているか熱心に見守るべきこと。（二）家庭礼拝を決して怠らないこと。そのとき聖書朗読と讃美歌の合唱は、通行する土着民にも聞えるよう、なるべく大声でなさるべきこと。（三）住民に罪と救いのことを語ること。特に彼等が馬鈴薯の植付け、とうもろこしの種蒔き、その他の仕事に雇われたときを選ぶのがよい。（四）先ず児童を集めてこれに教えをなし、彼等を通して、大人に語りかけること。次に日常の生活様式に関する注意としては、（一）住民に、「怠けて時を過してはならない。絶えず、農事に、建築に、造船に、撚絲の生産その他有用な労働に時を用うべきこと」を教える。（二）住民を彼等が独立の生計を得るため、自分で麦を作り、豚を飼い、家禽を養う様仕向けること。（三）住民と贈物のやりとりをしないこと。（四）住民に手細工物をポートジャクソンに送らせ、これを売つて勤労の利益を知らせること。（五）どんなことがあつても、土地の戦闘には関係しないこと。等である。ここにも布教者が最初から一種の文化使節としての役割を同時に与えられていたことが知られるのである。この様な伝道上の心得を受けてホールとキングは一八〇九年マーズデンに従つてニュージーランドへ向い、ケンドールは都合で少しおくれてその後を追つた。

マーズデンが乗り込んだのはアーン号という囚人船であつた。囚人達はニューサウスウエールズに送られるものであつた。しかるにたまたまこの船にマーズデンはニュージーランドの一青年を見出した。彼の名はデュアテラ（Duaterra or Tuatara）と云い、酋長の子であり、前述のテパヒの親戚にあたるものであつた。五年前故国を出で以来船乗りをしていた。彼はロンドンに来てイギリス皇帝に会いたいと考えていたが、それは到底ゆるされず、のみならず上陸してロンドンの市街を見物することすら許されなかつた。あまつさえ病にかかり、ひどく咳をしており、船室に閉じこもり、生命も危いほどであつたが、このときマーズデンに見出されたのである。マーズデンは親切に介抱し、やがて病が少し治つたので彼を母国に伴うことになつたのである。ここにおいて、この青年は帰国後必ず全力を挙げてマーズデンの活動に従うことを誓つたのである。

アーン号は一八〇九年八月出帆し、翌年二月ポートジャクソンに到着した。彼等はただちにニュージーランドに向わんとしたが、たまたまかの地からイギリス船ボイド号（五百トン）がマオリ人により焼払われたという報道が伝つた。ボイド号の乗組員は数名を除き殆んど全部殺され、少くとも約七十名が食われてしまつたのである。この惨事もそれ以前にこの地を訪れた商人達がマオリ人を殺したのに対する復讐であることが分つた。このマオリ人の行動に対して、白人の捕鯨家達は酋長テパヒの村を焼打ちしたのである。

この様な事件及びその後の種々な理由によつて、マーズデン一行の出発は五年間後れることになつた。数ケ月後捕鯨船はかのデュアテラを伴い、ニュージーランドへ向け出帆した。彼は一端帰国後は再び来つて彼地の状勢をできるだけ早くマーズデンに報告するよう依頼されていた。けれども、これから約一年以上が経つたがデュアテラからは何の便りもなかつた。そこで協会の一同は不安に駆られて来た。このときデュアテラが再びポートジャクソンに現われた。彼の語るところによれば、かの捕鯨船の船長は彼をニュージーランドに上陸を許さず、彼をノーフォーク島につれゆき、ここに置き去りにしたのである。しかるに機会が来て、他の船で帰つて来ることができたものと判明した。デュアテラは

そこで再び故郷への便船を待つているうちに、今度はついに望みが達せられた。帰郷後諸酋長に事の次第を報告したけれども、人々は彼の海外での見聞談を信用しなかつた。とにかく植民者達を招くことだけには賛成してくれた。ことにデュアテラはマーズデンから託された小麦を蒔いて、それからとれた小麦の粉からパンをつくつて人々に与えたので、酋長達に喜ばれた。

けれどもマーズデンにとつて他の困難が生じた。それはニューサウスウェールズのイギリス人自身の間における反対であつた。彼等と南海の捕鯨者、貿易業者達は、マオリ族を改宗させるよりも、これを滅ぼす方が有利であると考えたのである。それで誰もマーズデンをニュージーランドへ乗船させるものはなかつた。それだけでなく、ニューサウスウェールズの政府当局も、マーズデンが植民地附牧師という公務をおいて他所へ旅行するのを許さなかつた。そこで彼は自分で百十噸の小船アクティーヴ号を買受け、これで渡ろうと計画した。そして先ずケンドールとホールを実地調査に派遣した。彼等は調査を終えて一八一四年八月二十二日デュアテラ他六名の酋長を伴つてシドニーに帰つて来た。その中にはデュアテラの伯父にあたるホンギ（Hongi）というものもいた。彼等の報告により、ニュージーランドへの植民が甚だ有望であることが分つたので、政府もマーズデン等にそれを許可したのである。

準備がととのい一八一四年十一月二十八日ポートジャクソンを出帆した。一行のものはイギリスから来たかの三名とその家族及び数名の技術者並びにニュージーランドから来訪中の若干のマオリの酋長達であつた。[20] 船は十二月十五日北島のノースケープに到着した。デュアテラの故郷というのは、それよりも少し南のアイランド湾の附近であつたが、ここに一行は十二月二十二日（木）に到来し、植民を始めようと思つた。

彼等が来てみると、アイランド湾附近では、たまたまアイランド湾の部族とワンガロアの部族との間に戦闘が始つていた。両軍はそれぞれ陣地に拠つて相対峙していた。この危険な状態にあつてマーズデンは、デュアテラのとめるのもきかず、一二の通訳を伴い、身に寸鉄をも帯びずして上陸した。かくて彼はマオリ族の陣地に到り、各酋長を説いて戦

闘を停止させるのに成功した。その夜は部落民とともに野天の陣地でともに眠り、翌朝酋長達を船に呼び、これを饗応し、また船から牛馬を贈物として陸揚げした。これは住民にとつて全く珍らしいものであつた。この様にしてはじめてマオリ族との親交が結ばれた。これが金曜日であつたが、翌土曜日は十二月二十日で一行はクリスマスの準備に忙がしく、かくてこの地での最初のクリスマスとなつた。一行はデュアテラの好意により、急ごしらえの礼拝所において、いとも厳粛な礼拝を行うことができた。聖書のルカ伝二章十節が読まれ、これをもつて同地の布教が開始されたのである。時に一八一四年十二月二十五日であつた。

その後、マーズデンは土地の二十八名の酋長を伴つて近海を廻航し、その間彼等と親善を加えた。そこで酋長達はマーズデンに土地を提供することを応諾した。マーズデンは一八一四年アイランド湾附近ランギホに二百エーカーの土地を買いこをニュージーランドにおける最初の宣教所としたのである。この土地を彼は僅か斧十二個と交換したのであつた。[21] これ白人によるニュージーランドの土地買収の端緒であり、これ以来土地の問題でしばしば住民との間に紛争が起り、ついに一八六〇年台には凄絶なるマオリ戦争が惹き起されたのである。

マーズデンによつて始められたこの植民地の第一の事業は穀類の植え付けであつた。彼等は住民に麦の種を与えてその栽培を教えたが、住民はその実が芋の様に根に出来るものと考え、穂の出るのを待たず根を掘つて見たが何もないので皆引抜いて焼棄てるというようなこともあつた。又、住民は斧や針、その他凡て鉄製品を欲しがつた。それでマーズデンはそこに三つの鍛冶工場をつくり、これをもつて住民に種々の道具を作つて与えた。この他、ホール夫人は豚や馬鈴薯で西洋料理をつくり、住民にふるまつたので喜ばれた。また彼等は木を伐り、これを木挽することを教えた。[22] 以上は彼等が住民に示したいわゆる「文明の諸技術」の一部に過ぎなかつたが、これらは、出発前から予め準備された意図に基づくものであつたことは前述の通りである。

マーズデンは二ケ月のニュージーランド滞在後ニューサウスウェールズに引き返えした。そしてパラマッタからイギ

リス本国へニュージーランドに関する報告書を提出した。これは人々に大いなる関心を喚起したのであるが、その反響が現われるまでにはなお数年を要したのである。この報告がロンドンに達したのは一八一六年の初めであつたが、この年パラマッタでマーズデンに教育を受けたことのあるマウイという一マオリ青年が船員となつてロンドンに来て、船長により教会外国伝道協会本部に連れられた。そして将来マオリ伝道に従事すべく、パッディントンにおいて神学教育を受けることになつた。彼の将来は大いに嘱望されていたのであるが、その年の十二月二十八日病死したのである。その頃同じく教会外国伝道協会の本部にアフリカのスーソー布教所からその地の酋長の子シメオン・ウィルヘルムという青年が神学教育を受けるため留学していたが、彼も亦このマオリ青年と相前後して病死した。このように、一はニュージーランドの、他はアフリカの青年が、立派なキリスト教の信仰をもつて一生を終つたということは、イギリスの信徒達に強い印象を与えた。この二人の青年の最期は、一八一八年二月北米コンネティカット州のコンウォール神学校で病歿したハワイ青年オブーキアのそれに髣髴たるものがある。[23]

この間マーズデンはパラマッタにマオリ人のための学校を経営し、そこで「生活の技術」を教えつつあつた。この学校は数年間存続した。しかるに一方アイランド湾の植民地では、マーズデンがその地を去る少し前一八一五年三月三日、かのデュアテラが病死し、植民者達に大きな打撃となつた。あらゆる種類の野蛮行為が横行して植民地を絶えず脅かしていた。この間にあつて、ホールとキングは、土着語の研究を始めたが、あまり進捗しなかつた。但しケンドールの方は多少の進歩を見た。更にその植民地の対岸には、逃亡囚人の植民地があり、これにより、いつも危険を感じさせられていた。

一八一九年マーズデンは第二回のニュージーランド訪問に向つた。最初のときから四年半がたつていた。このとき彼はバトラー（John Butler）という教会外国伝道協会の宣教師及びその家族を伴い、又、ケンプ（Kemp）夫妻も同行したので、ニュージーランド植民地は一時活気を呈した。そして今度は前植民地を去る十哩のキッデーキッデーに一万三

千エーカーの土地を買い、ここに新植民地を開いた。この地の酋長の一人ポマーレ（Pomare）は是非鍛冶屋を遣わしてほしいとたのんだが、急の間に合わないので、マーズデンはその将来を約し、とりあえず数箇の鋤を与えて満足させるという様なこともあつた。

一八二〇年マーズデンは第三回の訪問をした。このときすでに当植民地は相当の発展を示し、「生活の技術」普及は着々実現されつつあつた。すなわち野は一面の麦畑になり、あちこちには牛馬が放たれ、シドニーから送られた果樹は豊かに実り、鍛冶、製材、製綱等の事業は繁栄し、又、寄宿学校ができて、教育事業も営まれていた。ケンドールは学校の校長をつとめると同時に、農夫、医師、言語学者として活動し、このときすでに、マオリ語の研究の成果を小論文として纒めていた。しかるに他面、附近の逃亡囚人或いは貿易業者達は又しても住民に残虐を加え、それより前一、二年の間に約百名の住民を殺していたのである。かかる状況にあつて植民地の指導者達の要求したところは、本国政府の援助の下に不法白人の跳梁を封じ、植民地の秩序を維持し、もつて民心を安定することであつた。このことについては、マーズデンもしばしば当局に愬えていたのである。これにこたえて、ニューサウスウェールズの知事ダーリング（Sir Ralph Darling, 1825-31 在職）は本国政府に海軍の力で同植民地を守備するよう提議している。この提案の中に、ダーリングは、マーズデンが兵力派遣を要請したわけではないが、さりとて、これに反対しているのでもないと述べたといわれている。[24]

一八二〇年ケンドールはこの地の最も有力な酋長の一人であるホンギを伴つてイギリスに向つた。彼は前述のように、かつて一八一四年マーズデンなどがニュージーランドに出発する以前、デュアテラなどとともにポートジャクソンを訪れたことのあるものである。それ以来宣教師などの信任厚く、最善のマオリ友人として親交を続けたのであつた。ケンドール一行は三月二日アイランド湾を出帆し、無事十月八日テームス河口に到着した。ケンドールはあらかじめ教会外国伝道協会の東洋語学者リー教授（Samuel Lee）にニュージーランド語の文法書編纂のことを依頼しておいたの

であるが、帰京後同行したホンギ他一名の酋長の助けをかりて共にその仕事にかかつた。二ケ月の後、マオリ語文法及び単語集が出来、これはその後のあらゆるマオリ語訳事業の基本になつたのである。

このときホンギはイギリスの文明を目のあたり見聞することにより、是非ともニュージーランドにもこれを実現したいと考え、約百名のイギリス人技術者を派遣されたいと願つた。またニュージーランドに鉄鉱を見出し、直接郷里で鉄の道具を作りたいと考えた。彼は滞在中とくにイギリス皇帝ジョージ四世に謁見するを得て、そのとき宮殿内の武具を見るにつけいよいよそれがほしくなつた。又これと同時に、マオリ語を語り得る説教者をも送られたいと依頼した。

ホンギは帰国に際し、多量の銃器弾薬を購い、又、途中シドニーでもこれを手に入れた。彼はそのときイギリスで贈られた貴重な土産物ことに皇帝からの贈物まで売払つて武器に換えたのである。彼のイギリス訪問の目的は一にこれにあつた。更に彼が考えたことは、「イギリスには王はただ一人である。ニュージーランドでも王はただ一人でなければならない」というのであつた。

旅行中ホンギの胸に描かれたニュージーランド統一の夢は帰国後直ちに実行に移された。すなわち彼の強敵ハウラキの酋長ヒナキ（Hinaki）と一戦を交えることであつた。ヒナキはよく防戦につとめたが、ホンギの新鋭の武器の前には如何ともしがたく、ついに敗れて自らもホンギの弾丸にあたつて戦死した。

教会外国伝道協会では最初から住民に武器を売ることを禁じていたのであるが、宣教師のうちにはこれに違反するものもいた。ホールとキングはこれに従つたが、ケンドールは命に反してホンギの希望を容れて武器と食糧とを交換していた。このことが一八二二年の同協会の委員会で問題となり、彼は同協会から除名された。彼の他にも、バトラーの子及び技術家一名も除名となり、バトラー自身もその翌年同様の処分を受けた。しかし、同植民地には、一八二二年ヘンリー・ウィリアムスという元海軍々人であつた宣教師が加わり、同地の布教に新機軸を劃した。又その翌年の一八二三年には十三名の宣教師がイギリスから派遣され、ニューサウスウェールズからも数名が増援され、教勢は進展に向つ

た。

以上はイギリス国教会派の教会外国伝道協会の活動であつたが、一八二二年には同じくイギリス人でウェスレー派の宣教師がニュージーランドに布教を開始した。同派のレイ牧師（Rev.S. Leigh）は一八一九年マーズデンの求めに応じて、ニュージーランドを訪問したことがあるが、一度イギリスに帰えり、本部からの正式の任命を受けて一八二一年ニューサウスウェールズから家族とともにこの地に移り、一八二三年アイランド湾北部のワンガロアに布教所を開いた。しかして更にターナー（Turner）とホワイト（White）が加わり、一八二四年には宣教所の建物が出来、本格的な布教が始つた。しかしこれは教会外国伝道協会の布教と対立したものではなく、初めから両者は密接な提携をもつていた。

一方ホンギはその後も鉄砲と弾薬を求めていたが、宣教師達は、少数のものを除く他大多数武器を斡旋してくれなかつた。そこでホンギは、彼がロンドンに滞在中思うように武器が手に入らなかつたのも植民地の宣教師達が本国へ邪魔の手紙を書いたからであろうと考え、漸次宣教師に敵対的になつてきた。ホンギだけでなく、住民達も、武器を世話しない白人とはもはや交わりを続ける必要がないと考え、又、従来植民者達の命によつて忠実に労働していたものにも今や怠惰の徴候が見えてきた。彼等は植民者達を軽侮し、その住宅に押入り、種々の注文を強要するのであつた。かくてホンギ一党は一八二七年一月十日ワンガロアのウェスレー派の布教所を襲い、これを破壊するに至つた。暴徒は宣教師達を追い立て、その持物を掠奪した。しかしこのときホンギは傷を負い、それがもとで翌年の一八二八年傷病死をとげたのである。かくて今や、イギリス人にとり、最も手強い障害が取除かれたのである。これ以来植民と布教は順調に進むこととなつた。ウェスレー派のワンガロアの布教所はそのときをもつて閉鎖され、宣教師は一時オーストラリアに引揚げたが、数ケ月後事態が静まつたとき再び帰つて来て、こんどはホキアンガに新布教所を開設した。これは大いに成功し、一八三一年には最初の改宗者を得、一八三四年には八十一名の受洗者を出し、マングングに新教会堂を建設した。しかして一八三八年にはマングングの礼拝出席者は一千名となり、一八四四年にはオークランドに神学校が設立さ

れ、一八五五年同布教所はオーストラリア・ウェスレー派協議会（The Australian Wesleyan Conference）の管理するところとなつた。その後順調な発展をとげ、太平洋におけるウェスレー派の布教の一根拠地としての重要性をもつに至つた。

この頃からカトリックの布教も始つた。従来イギリス政府は、国の内外を問わず全面的にカトリックの弾圧を行つていたのであるが、一八二九年イギリス本国でもカトリック解放令が発布され、植民地でもその布教が始つた。かくてオーストラリアでも一八三二年以来カトリック宣教師が入国し、ニュージーランドでも、一八三八年、マリア会のフランス人ポンパリエー（Jean Baptiste François Pompalier）がコロラレカに到来した。これより先き、一八二八年ニュージーランドにおける恐らく最も初期のカトリックの教徒であるアイルランド人ポイントン（Thomas Poynton）がホキアンガに入植していた。彼の妻も熱心なカトリック信者であつたので、その子をシドニーまで送つて洗礼を受けさせた。このことなどが一つの契機となつて、シドニーを始めローマでもニュージーランドに対するローマ・カトリック教の布教の必要が痛感されるようになり、一八三五年ニュージーランドは、はじめて西方太洋洲の代牧区の中に編入され、一八三六年ポンパリエーが法王グレゴリウス十六世によりニュージーランドの宣教師に任命され、一八三八年一月十日他の三名のマリア会員とともにホキアンガに上陸したのである。彼等はここに十字架を建て、最初のミサを行つた。このカトリック植民村の初代の移民団はアイルランド人であつた。一八四二年ニュージーランドは独立の代牧区となり、ポンパリエーが初代の代牧に任ぜられた。又宣教師の数も増したが彼等は皆フランス人であつた。かくてカトリックの布教は急速に進展した。一八四〇年にはカトリック村の全人口五千人中、信徒五〇〇名であつたが、十一年後には全人口二六、七〇七名と増加し、その信徒数も三、四七二名となつている。一八四八年カトリックの布教区は二区に分れ、一はオークランドであり、ポンパリエー司教が統理し、他はウェリントンであり、ヴィアード（Viard）司教補がこれを管理した。そして彼は一八六〇年司教に昇進した。一八八五年ニュージーランドに大司教が置かれることにな

り、ウェリントンがその所在地となり、レッドウッド（Redwood）がこれに任ぜられた。[25]

ニュージーランドの初期の布教はこのようなものであつた。これは全くこの地の植民の準備をしたものと云つてよい。オーストラリアでは先ず囚人植民地が開かれ、組織的な布教は一世紀ばかりこれに後れたのであり、カナダでは植民とインディアンへの布教が同時に始められた。ニュージーランドでは先ず布教が植民に先立つたと云うことができる。[26]

イギリス本国からの一般民間の植民は一八二六年に始まる。これより先き一八二二年フランス人ティエリー（Baron de Thierry）というものが北島のホキアンガに植民を始めたが、これに刺戟されて、イギリス人ダーハム（Lord Durham）の後援の下、英国に一八二五年一つの植民協会が組織され、その翌年この協会の世話により、ハード（Captain Herd）指導の下に若干の植民者達がニュージーランドに渡り、北部にいくばくかの土地を買つた。これはあまり成功したとは云えないが、イギリス人の心にニュージーランド植民への関心をたかめたことに疑いない。かくて一八三九年ダーハムを中心とするニュージーランド会社（The Newzealand Company）の成立となり、これはあたかも東亜における東インド会社と同様有力な地位をもつに至つたのである。この会社によつて、一八四〇年にはウェリントンとオークランドに、一八四一年にはニュープリマスとネルソンに、一八四八年にはオタゴーにそれぞれ植民地が始められたのである。

イギリス政府では、このように単に民間側にニュージーランドの植民をまかせておくのを不利と考え、一八三三年にはブスビー（James Busby）を派遣して「アイランド湾駐在行政長官」という官名を賦与した。ただし未だニュージーランドを英国の統治下に収めることは宣言していなかつたので、彼の立場は主としてこの植民地における白人の暴行を取締るのを職責としたのである。この際彼は宣教師の援助によりその任務を遂行することができたのは注目すべきことである。[27]

一八三五年かのフランス人ティエリーはタヒチ島から、彼自身ニュージーランドの主権を有するものであるという宣言を発表した。これはイギリスを刺戟し、宣教師とブスビーは同年十月二十八日共同の宣言をなし、「ニュージーランド諸部族連盟」(The Confederation of the United Tribes of New Zealand) という体裁の下にニュージーランドの独立を中外に宣明した。これは宣教師側から見れば一種の神権政治体制を樹立したいという希望の現われに他ならず、英国政府からの考えによれば、イギリス以外のヨーロッパ人の介入を封じようとする意図に出たことは明かであつた。[28] 更にこのティエリーの宣言は他のイギリス人にも波紋を与え、ついにニュージーランドをイギリスの主権の下に置きたいという考えが有力になつてきた。しかしこれに対して、マオリ族側では強硬に反対したのであるが、この反対にはフランス人カトリック宣教師達の支持があつたものと見られている。[29]

イギリス人のニュージーランド植民史上エポックをなすものは、かのワイタンギ条約 (The Treaty of Waitangi) であつた。一八四〇年二月六日、アイランド湾岸のラッセルに面するワイタンギ瀑布の近くにマオリ族の四十六人の主な酋長及び約五百名の弱小酋長達が集つて、イギリス側副知事ホブソンとの間に結ばれた条約がそれである。この条約の要点は主権と所有権と市民権の三つに関するもので、取決められた条項は大略次の如くであつた。[30]

第一条　住民の首領達はニュージーランドにおいて、彼等が有し又は有すべき土地に関する凡ての主権を挙げてイギリス女王に委譲すべきものとする。

第二条　ニュージーランドの首領又は部族或いはそれぞれの家族又は個人に対して、その土地、財産、森林、及び漁場等の所有権を保障する。但し若し彼等がこれを売却する意志があるときは、その先買権はイギリス女王に存し、且つその価格は適宜協議さるべきものとする。

第三条　イギリスの女王はニュージーランドの住民を保護し、且つ英国臣民の享受する凡ての権利と特権を賦与さるべきものとする。

即ち、これによれば、英国当局は住民に対して主権を委譲せしめ、その所有権を保障したのである。これはイギリス人の着実な植民政策の現われであつて、土地及び財産等の現実の所有権は現状を認めて、急激な変化によつて住民を刺戟しないが、しかも、将来に向つては、個別的に土地買収の道を条約によつて開いたものである。しかして、一切の主権を挙げて英国女王に委譲せしめることにより、イギリスの実質的な支配を単にマオリ族に対してだけではなく、又対外的に確立したことを意味する。現に、ホブソンはその年五月十二日ニュージーランドがイギリスの領有となつたことを宣言している。又、第三条の植民地人民の諸権利の条項も、各国の植民地の条約において概ね同様のものを認め得るのであるが、これら三つの条項は、実施に当つては、その解釈に関連して極めて困難な問題を予め含んでいたのであり、イギリス人とマオリ人との双方に危惧の念が存在した。或る論者の見るところでは、住民は「主権」と「所有権」との区別に暗いものと考えられたが、案外に彼等はよくこれを識別し、マオリ人こそ「影を棄てて実を保留しようとした」のであると考える。[31] 事実マオリ人は、その後土地問題が起る毎にこの条約の所有権を最後の楯としたのである。

とにかく、この条約は英人のニュージーランド確保の礎石となつたものである。しかして、ここに注目すべきことは、この際にも会議の成立に当り、宣教師の非常な努力があつたことは明かであり、又、マオリ人酋長達の条約への署名に当つては宣教師達の特別な活動がなされたことは重要である。即ち、マオリ社会には前述の様に一人の代表的な責任者又は代表的な渉外機関がなかつたから、この様な条約には条約の相手が誰であるかを定めるのに骨が折れたのである。そこで条約第一条にも、ニュージーランド諸部族連盟の首領達及びそれに加盟していない独立の首領達がイギリス女王に主権を譲るとなつておるにも拘らず、会議に参加したのはその中の一部であり、ニュージーランドの全酋長達から署名を求めることは事実上甚だ困難であつた。この様な事情にあつて、宣教師達は、条約が成立した一八四〇年二月六日以後約六ケ月に亘つて、諸地方の酋長達の間に条約の調書を持参し、最終までに五百十二人の酋長から署名を得ることに成功したのである。[32]

このとき以来イギリス人のニュージーランドにおける植民はいよいよ本格的に進められたのであるが、爾後約三十年間はイギリス人と原住民との間の腥い闘の期間であつた。しかしてその原因は主として両者の間の土地問題に関わるものであつたのは、反文化接触変容（contra-acculturation）の現象及びその原因として、注目すべきものである。

マオリ族の信念によれば、他のポリネシア諸種族におけると同様、又、最初に述べた様に、土地は神聖なものであり、それは先祖代々種族の共有となつていた。それは神々の社のある場所であり、祖先がそこで戦い血を流した記念すべき土地であつた。種族の各員は或る特定の場所に居住しそれを耕すけれども、その権利は絶対的なものではなく、ましてそれを売買することは部族全体の同意なくしては許されないことであつた。これが土地をめぐつて白人との間にしばしば紛争の起つたゆえんである。

さて、ここで問題となるのは、宣教師と土地問題との関連についてである。ハワイでは一八五〇年まで白人に土地を売ることはハワイ王国の禁令になつていたので宣教師の土地購買ということは起らなかつたが、ニュージーランドではそうでなかつた。ここではマオリ人の統一政府がなかつたから、宣教師にとつて土地購入の個別的交渉の機会が存したのである。これが却つて問題の起るもとになつた。

前述の様に、マーズデンは一八一四年十二箇の斧をもつて二〇〇エーカーの土地と交換している。その後一八一九年までに五人の宣教師と技術者とが四十八の斧をもつて、一、三〇〇エーカーの土地を買つていた。又一八三〇年から一八三五年の間に、ホキアンガとアイランド湾だけでも宣教師は二七平方哩の土地を購つたが、それは少しばかりの鉄砲弾薬と交換されたのである。一八四一年にはマシウス（Rev. J. Matthews）は三、〇〇〇エーカーを、ウィリアムス（Rev. W. Williams）は八九〇エーカーを、クラーク（Clarke）は一、九〇〇エーカーを、デヴィス（Davis）は六、〇〇〇エーカーを、フェアバーン（Fairburn）は二〇、〇〇〇エーカーを、ケンプは一八、〇〇〇エーカを、キングは一〇、三〇〇エーカーを、シェファード（Shepherd）は一一、八六〇エーカーの土地を所有していた。またテイラー

(Rev.Richard Taylor) は一八三八年ニュージーランドに渡つて以来一八四五年までに、五〇、〇〇〇エーカーを所有するに至つた。それのみでなく、彼等の或るものは商行為によつて莫大な利益をえたのである。一八五〇年のことであるが、ローリー (Rev. Walter Lawry) というオークランドのウェスレー派宣教所の主任牧師は金を貸して二十パーセントの利をとり、又、相場に関係して巨大な富を獲てオークランド随一の金満家になつていた。[34] 又、ハワイにおけると同じくその子らもまた親に倣つて実業に従事した。この様な植民地での宣教師の此の世的な繁栄ぶりは、母国の有識者の批判の対象となり、一八四五年の下院では、これら宣教師の裕福さがカトリック宣教師の聖貧と比較され問題となつたということである。[35] 又、初代植民者ウェイクフィールド (Edward Gibbon Wakefield) の当時の実状に対する批判によれば、一八四〇年教会外国伝道協会は、ニュージーランドに有する既設諸機関によつて毎年殆んど十万ポンドの利潤を獲ているといつている。[36] ただし、宣教師の場合はこれが住民との親善関係において行われるので事なきを得たが、一般植民者達がこれを倣つたとき、たちまち住民との間に衝突を惹起した。宣教師と異り、植民者達は常に事件を鉄砲で解決しようとしたからである。

かくていくたの流血の惨事が勃発したが、それは最後にかのいわゆるマオリ戦争 (the Maori War) となつて現われた。これは大体一八六一年から一八七一年に至る約十年間の長きに亘つてイギリス人とマオリ族との間に行われたものであり、マオリ族の最後のレジスタンスであつたということができる。この間彼等は到るところ強固な要塞(パーpah)を築き、しばしばイギリス軍に大なる打撃を与えたのであるが、一八六九年十二月、ワイカトの酋長が平和を申込んだのを最後に遂にマオリ人は英人に従つた。[37]

この間、見逃し得ないのは、マオリ族の間におけるかのハウハウ教 (Hauhauism) の運動である。この運動は元来パイ・マリレ (Pai Marire) と称され一八六四年四月頃から起つたものである。その開祖はテ・ウア (Te Ua) と云い、もと腹話術を業としたものであつた。彼等はキリスト教とマオリ族の固有宗教とを混淆せしめて、この運動を始めたの

である。これも、文化接触変容の推移過程において、諸民族或いは諸種族の間に、しばしば起る現象であり、一種の種族復興運動（ethnic revival）である。しかしてその形態としては、概して固有文化と新来文化又は宗教との折衷主義（syncretism）となつて現われる。[38]

ハウ・ハウとは彼等が戦闘のとき全軍声を揃えて唱えた呪文であり、「ハウ・ハウ」と叫んで突進すれば、天使ガブリエル及び聖母マリアの守護を受け、弾丸も身体を貫く能わず、戦いは必ず勝利を得ると信じられたのである。これ中国の義和団における信念と相通ずるものがある。このハウハウ教はカトリック宣教師の影響によるところがあると考えられている。即ち、イギリス人に信を失つたマオリ人はフランス人により教えられた新しいキリスト教に示唆を受け、世末的な運動を起したのである。殊に彼等は旧約聖書の出エジプト記に暗示を受け、イギリス人はエジプト王パラオであり、ハウハウ教の開祖はモーセであると自称して、イギリス人の圧迫からマオリ族を救出することを目的とした。[39]伝えられるところによれば、開祖は天使ガブリエルにより凡てのイギリス宣教師を追い払い、聖書を焼き、安息日を廃し、ひたすら「マリアの宗教を採用せよ」とのお告げを受けたというのである。[40]かくて彼等は先ず、教会外国伝道協会に属するドイツ人の宣教師一名（Karl S. Völkner）と、ウェスレー派のイギリス人宣教師一名とを殺し、更にワイタンギのイギリス人の植民地を襲撃してこれを破壊した。これを手始めとして、その信仰はたちまち四方に拡がつたのである。これは一端一八六五年七月二十一日グレイ（Grey）のイギリス軍によつて鎮圧されたが、一八六八年再び勢力を回復し、マオリ軍を奮起せしめた。しかしてこのときは、イギリス軍に相当の打撃を与えたのであるが、これもまた一八六九年一月ホワイトモーア（Colonel Whitemore）の軍によつて敗られ、その後遂に挽回の機会は来なかつた。しかしその頃（一八七〇年）においてさえも、その教徒の数は全マオリ約五万人中、九千人を算したものと推定されている。これが白人に対する武力による最後の抵抗であつた。

三

以上がニュージーランドにおけるマオリ族と白人との間の文化接触変容の初期の段階の概要であつた。これ以後両者間の関係は著しく平穏となり、以後は専ら政治、経済的な統治方式が住民を支配した。

しかし、それまでに、マオリ族は既に植民者の進出により大いなる打撃を受けていた。それはマオリ人の人口減少の現象に明かである。白人到来の前の人口は、クックの推定によれば約一〇万であつたとされており、又、ヘンリー・ウィリアムス牧師の一八三五年の推定によれば二十万であつたであろうとされ[41]、又他の資料[42]によれば、一八四〇年に二五万であつたとされているが、これが一八五八年には五万六千、一八九六年には四万二千になつたものとされている。はたして白人渡来以前二五万乃至一〇万の人口があつたかどうか分らないが、白人と接触後急激に減じたことは疑いない。十九世紀末には一時マオリ族は近い将来に絶滅するものと予言されたほどである。

この様な人口激減の現象は白人との文化接触における普遍的な現象として太平洋のどの植民地にも見られるものである。その理由は諸学者により種々論ぜられているが、人類学者ゴールデンワイザーは次の如き理由を挙げている[43]。(一)征服―虐殺・搾取・貧困化、(二)身体的退歩―白人の病気たとえば痲疹・猩紅熱・ジフテリア・結核その他のものの伝入、(三)文化的損傷―(イ)両文化間の隔りによる旧文化秩序の破壊、(ロ)社会・政治的変革による文化的空虚の発生、(ハ)宗教と現実との懸隔による信仰的混迷の招来、(ニ)生活的熱情の喪失による享楽的生活態度の醸成。この他ニュージーランドにおいて特に顕著なのは、かの鉄砲の輸入と、それが種族間の戦闘に用いられたことである。この点、ハワイにおいては、白人の到来後間もなく、カメハメハ一世による諸島統一がほぼ完成したので、種族間の闘争が彼等自身を禍いすることは少なかつた。しかるに、マオリ族の場合には白人到来後も族内闘争が絶えなかつたところ

に第一の禍いの根拠があつた。

しかるに、二十世紀とともに国内の平和と秩序が保たれ、且つ又、教育及び宗教による新文化への適合が促進され、漸次人口は増加するに至つた。即ち、一九一一年には殆んど五〇、〇〇〇人となり、更に十年後には五六、九八七人となつた。[44] しかして、一九五一年には白人を含むニュージーランドの全人口一、九三九、四七二人の中、マオリ族の人口は一一五、六七六人となり、[45] 多分元の人口と同じ程度又はそれを越えるものとなつたのである。この様な原住民の人口漸増の傾向も、多少の例外はあるが（たとえばタスマニアでは一八七六年最後のタスマニア人が死んで同族は絶滅した）、太平洋各地において概して見られる現象である。ところでその原因は、一般的に見て、原住民側の新文化環境への適合に若干の年月を要すること、及び、植民者側の同化政策が実を結ぶに至つたことを物語るものと思う。より具体的には、その間、消極的な面において、古くからの食人の風習及び嬰児殺しの風習が廃止され、又、同族間の戦闘が終息し、鉄砲による同族相滅ぼすことがなくなつたことが考えられ、積極的な面において、衛生の向上、新生活様式或は文明の技術の修得、新経済関係への適合等とともに、彼等が精神力或いは生活力を回復したこと等が挙げられる。しかして、これには教育と宗教の貢献が大きいのである。

殊に、布教者達は、前述の文化的諸技術を伝えたばかりでなく、教育文化にも貢献している。それは先ず彼等がマオリ人に文字を教えたことである。白人到来の当初には、マオリ人はまだ文字を知らなかつたが、宣教師達はその言語を習得し、これを整理して、アルファベットで表わすことを始めた。ハワイにおいても同様の試みがなされて成功したのであつた。マオリ人も一般ポリネシア人と同系統の言語を使つており、しかもマオリ人は彫刻又は細工などの造形芸術だけでなく、歌や昔噺や格言、伝説、神話等に芸術的な能力を示しておつたが、宣教師達はこれらを集めてアルファベットで収録するという貴重な仕事をした。又約六千語の単語集をつくつた。[46] これらはマオリ社会における固有文化の近代化に貢献したものと云い得る。

文字の伝入とともに、出版事業において、宣教師達はマオリ社会の教育文化に貢献した。出版物の代表的なものは聖書であつた。一八三六年ウィリアム・ウィリアムスは新約聖書のマオリ語訳を完成し[47]、又、本国の教会外国伝道協会から印刷技師コレンソ（Colenso）が遣わされ、マオリ人が助手になつて出版が始められた。マオリ語の聖書が出版されたとき、マオリ人は老いも若きも熱心にこれを読むのであつた。又住民の或るものは、聖書の片言隻句をも暗記してこれを好んで用いた。一八五六年にはマウンセル副監督（R. Maunsell）によつて旧約聖書の飜訳とウィリアムスの新約聖書の改訳が完成して、マオリ語の新旧約全書が出版され[48]、その他多くのキリスト教文書及び讃美歌がマオリ語で出版されたのである。

キリスト教の布教の結果もたらされたマオリ文化の変改として特記すべきものはマオリ族の従前の風習が改められたことである。特に食人の風習を廃止せしめ[49]、人身犠牲の慣習を止めさせたことである[50]。又、家族的には一夫多妻の風習が改められたのもキリスト教の影響によるところが大きい。

宣教師達は又、フランシスコ・サヴィエルが東洋伝道において同国人の悪徳と戦い、アメリカ人の宣教師がハワイで同国人の船員達の不道徳と戦わねばならなかつた様に、ニュージーランドでも白人の齎らした害悪の除去につとめたのである。わけても白人の伝えた強い酒類は住民の健康を害し、社会の道徳秩序を紊すことが多かつた。マオリ人の間では古来から公共の集会所があつて、そこで種族の種々の行事が行われ、重要事項が決められていたが、その際にも飲酒の風習により不法と無秩序が横行したのである。しかるに、一八八三年当時本国のイングランドで行われていた "The Blue Ribbon Movement" という禁酒運動がグレース牧師（Rev. T. S. Grace）によりニュージーランドにも伝えられ、これ以来種族間の酩酊・乱行の風が減少したのである[51]。

この他宣教師による直接教育事業も文化向上の上に重要な役割をもつたのである。即ち、一八五五年にはマウンセル副監督がワイカトに産業学校をつくり、それ以後、種々の学校が開かれた[52]。

以上が十九世紀末までのニュージーランドにおけるマオリ族の文化接触変容過程の概要であつた。二十世紀になつては、ニュージーランドはイギリスの自治領として、全く白人の社会としての性格をもつに至つた。それは人口から見ても大部分が白人であるからであつて、従つて現在ではマオリ族のイギリス文化に対する同化過程はほぼ完成したと見てもよいのである。マオリ人は白人と全く同等の市民権を与えられ、ニュージーランドの議会にも議員八十名の中、最近四名のマオリ人を代議士として選出している。[53]

しかし他面では、現在といえども、マオリ文化が全然死滅したのではなく、依然として残存し、日常の生活の中に生きているのが文化接触変容の考察上重要なことである。たとえば、言語においても、ハワイにおけるハワイ語の残存と同じく、現在もマオリ語は生きている。従つて小学校においてもマオリ語が正式に教えられている有様である。又、マオリ人にとつても教育は七才から十五才まで義務教育であり、どの学校にも行くことができるが、同時に領内に一五九のマオリ人小学校があり、これには白人の子供も通学できる。マオリ学校の学童は一三、四二六人の中、一、一一九人が白人で他がマオリの児童となつている。[54] しかし現在及び将来におけるニュージーランドにおける言語の問題は重要な問題であり、それ自体一つの大きな研究のテーマをなすものであるが、それが一朝一夕に死滅するものでないことは明かであり、又、他面、マオリ語自身に英語の影響があつて、それ自体変容し行くことも明かである。

宗教においても、キリスト教伝道の結果、十九世紀の末には、形だけでは少くとも、全マオリ人口がキリスト教化されたと云われているが、[55] 今日もなお、キリスト教とマオリ的民族感情との折衷宗教としてのリンガツ教（Ringatu religion）及びラタナ教（Ratana religion）が相当の信徒をもつている。リンガツ教は前世紀のマオリ戦争時代の種族運動の指導者テ・コオチ（Te Kooti）にその起源をもつている。彼は、マオリ族の帝王であることを宣言し、多くの追随者を得たのであるが、彼の死後もなおこの運動に含まれた種族の復興感情は根強く残存し、これがキリスト教の信仰に持ちこまれてリンガツ教を形成しているのである。ラタナ教はラタナという指導者を中心に始められたもので、これ

もキリスト教の信仰に病気の霊癒を加えたもので、彼は神の霊媒となり、マオリ種族の復興を目指すものである。[56]

この様に、過去一世紀以上に亘る白人の文化との接触にも拘らず、固有文化は容易に死滅するものではない。しかし、時代の推移とともに若い時代のマオリ人は漸次イギリス化の道を辿り、彼等は白人と文化の共同を何ら不思議のことと考えない。たとえば彼等青年達は第一次大戦のとき白人とともにアンザック兵（Anzacs—Australia New Zealand Army Corps）を構成し、兵役に参加し、全く社会的距離が縮つたことは明かである。文化接触変容の過程は、この様に、一面、外来文化への対立緊張と、他面、調和共同の二面の中に、マンハイムの言う「変転的平衡」（ever-changing equilibrium）を辿りつつ進展し行くものであることが認められるのである。

① ここにいう「文化接触変容」とは英語の acculturation の訳語であつて、従来「文化変容」として大体知られていた語である。私はこれを特に文化の接触面に重点をおいて「文化接触変容」と訳すのが適当であると考えている。なおアカルチユレーションの意味するところは、一九三五年アメリカの社会科学調査協議会により正式に定義されたが、それによれば「アカルチユレーションとは、異る文化をもつ人々の集団が、継続的な直接的な接触をなす場合、その結果として、それらの一方又は双方の集団における従来の文化様式に変化を招来する現象を意味する」とされている。この用語は前世紀の末から人類学者の間で用いられ始めたもので、初めは文明人による未開種族に対する文化接触並に文化化の現象を指して用いられたものであるが、現在ではこの用語は広く社会科学において、単に文明人と未開人との間だけの現象としてでなく、文明諸民族間の文化接触現象にも適用されている。文化接触変容の理論については、拙著『宗教社会学研究』（昭和二十八年関書院）に詳しく論述した。

② マオリという呼称がいつから用いられたかは明かでないが、住民の言葉で「マオリ」とは「土着民」「原住民」などの意であり、マツクナツブ（McNab）によれば、この呼び名は一八一八年以前には使われていないことが確かめられたといわれている。（Shrimpton and Mulgan, *Maori and Pakeha*, p. 19.）

③ Philip L. Soljak, *New Zealand*, Macmillan Co., 1946, pp. 23-25; Shrimpton and Mulgan, *Maori and Pakeha*, p. 22.

④ ニユージーランドは南緯三四度二五分から四七度一七分の位置にあるので、これを北緯で日本にあてはめて見れば、ほぼ西中

国の瀬戸内地方から樺太の南部位の緯度に相当する。その温度は北島の北部にあるオークランドで一月盛夏の平均摂氏約一九度、七月厳寒の平均約一一度、南島の南端近くにあるクインスタウンで一月真夏の平均約一六度、七月真冬の平均三度となつている。(*Encyclopedia Britanica*, 14th. ed., Vol. 16, p. 393.)

⑤ Philip L. Soljak, *New Zealand*, Macmillan Co., N. Y., 1946, p. 22.

⑥ マオリ族はニュージーランドに定着後、普通は亜麻製の胴衣や肩掛けを用い、高貴のものは鴇の羽でつくつた衣服を用いた。(I. L. G. Sutherland, *The Maori People Today*, Oxford University Press, 1940, p. 68.)

⑦ Dixon, *The Building of Culture*, N. Y., 1928, Ch. 111.

⑧ 純粋のマオリ族には若干のコーカシア系の顕著なものと、メラネシア系、モンゴリア系の顕著なものなどが存在し、彼等の中に、アジアから太平洋を移住の途上、他種族との交婚が行われたことが想定されるのであるが、大多数のものはポリネシア系であると見られている。 (Shrimpton and Mulgan, *Maori and Pakeha*, p. 21.)

⑨ Donald MacDougall, *The Conversion of the Maoris*, Philadelphia, 1899, p. 30; James Buller, *Forty Years in New Zealand*, London, 1878, p. 222.

⑩ マオリ家族に関連して従来学界で問題となつているのは、モルガンのマライ式親族制度についてである。この制度は未開人がその父をも父の兄弟や父の従兄弟をもすべて「父」と呼び、また母も母の姉妹も母の従姉妹をもすべて「母」と呼ぶ親族呼称法をもつ家族の制度であつて、モルガンはこれがハワイその他ポリネシア諸地方に存在し、これは人類婚姻の原始乱婚起源を裏付けるものであるという説をとなえたので有名である。しかして、このマライ式親族制度がマオリ社会にも存在したことは多くの学者により認められているが、これが原始乱婚起源を示すものであるか否かについてはウエスターマークその他の反対及び討議が広く行われている。即ち、ウエスターマークによれば、マオリ人の間でパパ (papa) という言葉で、父、両親の兄弟、両親のおじの子らが呼ばれているのは事実であるが、しかしマオリ人にも彼らの真の父という観念がないのではなく、パパという語のほかに真の父を表示するものとしてパパラ (papara) という語があるというベスト氏の報告 (Best, 'Maori Marriage Customs,' in *Trans. and Proceed. of the New Zealand Institute*, XXXVI, 28.) を引用している。 (Morgan, *Ancient Society*, N. Y., 1878, p. 408; Westermarck, *The History of Human Marriage*, Macmillan and Co., 1921, Vol. I, pp. 238, 272; W. H. R. Rivers, *Social Organizatoin*, London, 1926, p. 181; James Hastings, *Encyclopedia of Religion and Ethics*, Vol. VII, p. 703, Vol. VIII, p. 432; Robert H. Lowie, *Primitive Society*, N. Y., new ed. 1947, pp. 57-59.) これに関連してウエルントンのヴイクトリア大学講師で斯界の

権威ビーグルホール博士は右のマライ式親族呼称法の存在をマオリ族に認め、且つ、同族の間の一夫多妻制において、第二の妻は第一の妻の妹であることが普通であつたと述べている。(Ernest Beaglehole, 'The Polynesian Maori,' in Sutherland, *The Maori People Today*, Oxford University Press, 1940, p.61.)

⑪ Sutherland, *op. cit.*,p.71.

⑫ George Laurence Gomme, *Ethnology in Folklore*, London, 1892, pp. 151, 153.

⑬ James S. Dennies, *Christian Missions and Social Progress*, Fleming H. Revell Co., N. Y., 1899, Vol. II, p. 341 n. 4.

⑭ Robert P. Thomson, *A National History of Australia,New Zealand and the Adjacent Islands from their Discovery to the Centennial Era and from that Period to the Present Day*, London, 1917, pp. 213-214.

⑮ 拙著『宗教社会学研究』一八一—一八八頁参照。

⑯ Thomson, *op. cit.*, p. 216.

⑰ Eugene Stock, *The History of the Church Missionary Society*, London, 1899, Vol. I, p. 206.

⑱ James Buller, *Forty Years in New Zealand*, London, 1878, p. 262.

⑲ Eugene Stock, *The History of the Church Missionary Society*, London, 1899, Vol. I, pp. 206-207.

⑳ マースデンがニュージーランドへの初航海に用いたアクティーヴ号の船員は、イギリス人一名、アイルランド人一名、プロシア人一名、スウェーデン人一名、ノルウエイ人一名、アメリカ人一名、マオリ人一名、タヒチ島民二名、ハワイ島民一名及び他の白人一名で、彼等が諸国からの冒険家の寄せ集めであつた当時の状況を知り得る。(Eugene Stock, "The Christianizing of the Maori," in *The International Review of Missions*, 1916, p. 576.)

㉑ K. L. P. Martin, *Missionaries and Annexation in the Pacific*, Oxford, 1924, p. 30; S. H. Robert, *Population Problems of the Pacific*, London, 1924, p. 240.

㉒ Choules, *Origin and Development of Missions*, Vol. I, pp. 578-581.

㉓ 拙著『宗教社会学研究』三一一—三一三、三一一—三二二頁。

㉔ Martin, *op. cit.* p. 33.

㉕ *Catholic Encyclopedia*, N. Y., 1911,Vol. XI, pp. 40-43.

㉙ K. S. Latourette, *A History of the Expansion of Christianity*, Harper & Brothers, N. Y., 1943, Vol. V, p. 178.

㉚ Jenks, *History of Australian Colonies*, p. 172.

㉛ Martin, *op. cit.*, p. 35.

㉜ Eugene Stock, 'The Christianizing of the Maoris,' in *The International Review of Missions*, Vol. V, 1916, p. 580.

㉝ 一八四〇年のワイタンギ条約は全三箇条から成り、その正文は次の通りである。 (T. Lindsay Buick, *The Treaty of Waitangi*, New Plymouth, N. Z., 1936, Appendix I.)

ARTICLE THE FIRST.

The chiefs of the confederation of the united tribes of New Zealand, and the separate and independent chiefs who have not become members of the confederation, cede to Her Majesty the Queen of England, absolutely, and without reservation, all the rights and powers of sovereignty which the said confederation or individual chiefs respectively exercise or possess, or may be supposed to exercise or to possess, over their respective territories, as the sole sovereigns thereof.

ARTICLE THE SECOND.

Her Majesty the Queen of England confirms and guarantees to the chiefs and tribes of New Zealand, and to the respective families and individuals thereof, the full, exclusive, and undisturbed possession of their lands and estates, forests, fisheries, and other properties which they may collectively or individually possess, so long as it is their wish and desire to retain the same in their possession. But the chiefs of the united tribes, and the individual chiefs, yield to Her Majesty the exclusive right of pre-emption over such lands as the proprietors thereof may be disposed to alienate, at such prices as may be agreed upon between the respective proprietors and persons appointed by Her Majesty to treat with them on that behalf.

ARTICLE THE THIRD.

In consideration thereof, Her Majesty the Queen of England extends to the natives of New Zealand Her royal protection, and imparts to them all the rights and privileges of British subjects.

㉞ Jenks, *op. cit.*, p. 175.

㉜ Buick, *The Treaty of Waitangi*, Ch. V; MacDougall, *The Conversion of the Maoris*, 1899, p. 96.

㉝ Herskovits, *Man and His Works*, Alfred A. Knopf, N. Y., 1948, P. 537; 拙著『宗教社会学研究』一七七—一八一頁。

㉞ T. W. M. Marshall, *Christian Missions: Their Agents and their Results*, London, 1863, Vol. II, pp. 425-427, 430.

㉟ *Ibid* ., pp. 433-434.

㊱ 1840, New Zealand Committee, Evidence of E. G. Wakefield, in Martin, *Missionaries and Annexation in the Pacific*, p. 38.

㊲ Shrimpton and Mulgan, *Maori and Pakeha*, pp, 127 ff., 199 ff.

㊳ Kroeber, *Anthropology*, N. Y., 1923, rev. ed. 1948, p. 437; 拙著『宗教社会学研究』一八八—一九一頁。

㊴ Jesse Page, *Among the Maoris*, p. 128; Felix M. Keesing, *The South Seas in the Modern World*, The John Day Co., N. Y., 1941, p. 236.

㊵ Eugene Stock, *The History of the Church Missionary Society*, Vol. II, p. 631; Donald MacDougall, *The Conversion of the Maoris*, p.105; Robert P. Thomson, *A National History of Australia, New Zealand and the Adjacent Islands*, London, 1917, p. 221.

㊶ Shrimpton and Mulgan, *Maori and Pakeha*, p. 26.

㊷ *Encyclopedia Americana*, Vol. 20, p. 246.

㊸ Goldenweiser, *Anthropology*, pp. 429-430; 拙著『宗教社会学研究』一八四頁。

㊹ Keesing, *The South Seas in the Modern World*, p. 50

㊺ *Collier's Encyclopedia*, 1952, Vol. 14, p. 611.

㊻ Donald MacDougall, *The Conversion of the Maoris*, p. 17.

㊼ Stock, *op. cit*. Vol. I, p. 444.

㊽ *Ibid*., Vol. II, p. 625.

㊾ J. S. Dennis, *Christian Missions ana Social Progress*, Vol. I, p.151, Vol. II, p. 341.

㊿ *Ibid*., Vol. I, p. 151.

(52) *Ibid.*, Vol. II, p. 113; Stock, *op. cit.*, Vol. III, p. 556.

(53) Stock, *op. cit.*, Vol. II, p. 625.

(54) *Collier's Encyclopedia*, 1953, Vol. 14, p. 611.

(55) *Ibid.*, Vol. 14, p. 611.

(56) I. L. G. Sutherland, *The Maori People Today*, pp. 164-165, 354-366.

(57) Karl Mannheinm, *Freedom, Power, and Democratic Planning*, N. Y., 1950, p. 308.

Mizoguchi, Yasuo

The Early Stage of Acculturation in the Maoris

Résumé

This is a study of the sociocultural contacts and changes between the white people and the natives in New Zealand. The approach of this study was from the angle of the sociology of religion, for the main force of introducing the Western cultures was seen among the Christian missionaries who worked not only as evangelists but also as professional acculturators. The first part of this paper is the description of the main features of the original native culture. The second part is the observation on the process of the cultural contacts in the nineteenth century. The third part is the thinking about the results of the cultural contacts.